順天堂史

佐藤 尚 中 伝 (1)

A Biography of Shōchū Satō, the Founder
of the Juntendo Hospital in Tokyo

小 川 鼎 三*
Teizo OGAWA, M.D.

谷中の佐藤尚中の碑

上野公園の裏手、谷中墓地の中央を南北に貫くかなり広い道路があり、それに面して嘗て谷中の五重塔がそびえていた場所の近くに、石造の甚だ大きい佐藤尚中の顕彰碑が立っている。尚中は佐藤泰然のあとを継いで順天堂第2代の主であった人であり、幕末から明治にかけて日本の医学界の最高峯だったといえるので、この高さ2丈（約6メートル）という大きい記念碑も決してふしぎでない。

この碑の正面は西に向って、宮内文学従五位という肩書の川田剛の撰した碑文がきれいな楷書でぎっしりと書かれ、刻みこまれている。川田剛の撰文は明治16年7月とあるので、尚中が明治15年7月23日に56才で病没して、1周忌を迎えたときの作とおもわれる。碑の建立もほぼその頃であろう。石の性質がよいと見えて、多年の風雪にたえて碑文がよく読める。しかし漢文学の大家、川田剛（字は穀卿，号は甕江^{おうこう}）が綴ったものだけに、なかなか難しい文章である。

川田順の履歴をみると、備中松山藩の人で天保元年の生れという。従って文政10年生れの尚中より3年ほど若かった。順はまず同国の碩儒山田方谷の門に学び、ついで江戸にて昌平校に入った。維新のときは藩の帰属のため大いに尽力したという。維新のあと彼は大学博士となり、帷を牛込に下して多くの子弟に教えた。漢文学をもって

宮内省に出仕したので、この碑文でも彼の肩書が宮内文学となっている。後に貴族院議員、文学博士となり、学士会院（いまの日本学士院の前身）に入り、明治29年に没した。

その碑文の中で尚中が明治15年に没したことを書いて、その次に「明年門人相議して碑を建つ。文を余に請う。余先生と親し、義を善しとし、敢て辞せず」とあるので、川田剛が尚中と親しかったことがわかるし、維新のとき藩の佐幕か恭順かで苦勞したことも共通であり、兩人を近づけるのに幾分か影響したかも知れない。

碑文の上方に「故大学大博士佐藤尚中之碑」という篆額が刻みこまれている。これは「陸軍大将兼左大臣二品大勲位熾仁親王」の筆とある。維新のとき征東大総督の有栖川宮である。

碑石の裏面には上から下へ8段に分れて、イロハ順に寄付した人々の名前が354人分ならんでゐる。その中に注目すべき幾人かがあるが、ここでは述べない。第9段が門人有志者として22人の名前がならび、その中に最初の看護婦長といえる杉本兼女が含まれている。9段目の終り、すなわち全体の最後に幹事として次の11人が名を並べてゐる。

岩佐 純，長谷川 泰，浜野 鼎，大滝富三，
横井信之，小林義直，阿久津資生，佐々木東洋，
相良知安，佐藤湛斎，須田経哲。

これらが尚中の門弟として最も主な人たちであったのだろう。

川田剛の撰した碑文の初まりの所を自己流に読み下してみる。全篇の序文とみるべきだが、今まで殆んど紹介されていない。括弧内は筆者の注釈である。

* 順天堂大学医学部客員教授（医史学）
Department of Medical History, Juntendo
University, School of Medicine
[Feb. 9, 1972受付]

「国家中興して（明治維新のこと）仁術を崇尚し名医を訪求して佐倉の佐藤先生（尚中のこと）首めて其の選に膺り。陪臣（佐倉藩主堀田氏の臣）より擢んじて大博士兼大典医となる。世を挙げて伝称す。然れども先生の志は榮達にあらず。職を辞して家居し病院を開き生徒を養い、其の道を振起す。いわゆる豪傑の士、文王を待たずして興る者、或いは之に近し」

その後に続く文章が従来の佐藤尚中伝にはいつも利用されている。早くも建碑の2年後に大阪で出版された松尾耕三の近世名医伝巻之三（明治19年）に引用された。

尚中の墓はこの大きい石碑の近くで道路の反対側の脇道を入った所にある。

尚中の生いたち……山口家と北城家

尚中の少年時代については不明の点が多いが、文政10年（1827）4月8日に下総国（いまの千葉県北部）の小見川で小見川藩主内田氏の侍医山口甫僊（僊は仙と同じ、以下仙とする）の次男として生れた。母は小見川新浜の田村金十郎の二女で、名はエン、嘉永2年56才で没したと墓碑（小見川町善光寺）にあるので、尚中が生れたとき母親は34才、父甫仙は嘉永3年に62才で没したというので、当時39才であった。

いま小見川町では山口甫仙の邸あとが内浜公園として保存され、「佐藤尚中先生誕生地」と刻した大きな石碑が立っている。上方に「大学大丞大博士大典医贈従五位」という肩書があり、この題字を書いたのは伯爵堀田正恒である。碑の裏面に医学博士松本高三郎の書いた尚中の略伝が刻まれている。この碑は小見川を中心にした地方の医師たちが主張し運動して昭和11年に建てたもので、山口家の邸あとを小公園として保存したのも同時であった。今から数年前に没した小見川町の開業医本多元俊氏がその保存と建碑の事業に最も熱心な実行者であったとおもう。碑の除幕式は昭和11年5月8日、多数の縁故者や土地の人々が集まり、盛大に行なわれた記録が残っている。

尚中の幼名は竜太郎であったようで、また鏐

（リュウとよむか）という名を父から与えられていたと推察する。男の兄弟は3人であり、兄は甫仁といい病弱のため家督を継ぐに至らなかったと思われ、弟の晴海（後に甫仙と称した）が医者となり、家を継いだ。尚中にはレイという姉があったらしいが、詳かにしない。

父の甫仙が山口家に養子に來た人であって、常陸国（いま茨城県）の水郷潮来の北城家の生れである。昭和15年に「北城のゆかり」と題する北城家の系図が印刷されている。それをみると、甫仙（錦、尚綱）は北城東平（諱は庸行、字は子徳、通称が東平）の長男であり、「幼ヨリ英邁デ儒者宮本茶村、並ニ下総久保木蓄竜ニ師事、長シテ叔父京都智積院住職麟端法師ヲ尋ネ、医学ヲ研鑽後、下総小見川藩医山口家ヲ冒シ、甫僊ト称シ漢詩ヲ能クス……」とあり、なかなかの学者であった。

潮来の北城家に尚中の父山口甫仙が墨痕淋漓と六曲の屏風に書いた漢詩が残り、よくその風格を示しているという。その詩の後半は

自任ニ清貧ニ身垂レ世
無辺雑病術漸僊
朱門富貴輕如レ羽
冷眼依然醉視レ天

この詩は文政庚寅（13年）夏6月酔いて無機書屋に題すとあるので、尚中が生後3年で、甫仙42才のときの作である。甫仙の実父北城東平も「私ニ進義先生ト謚ス」とあるので、相当の学者であったとおもう。尚中は幼いときからそういう学問の空気の濃い中で育ったと思うのである。

尚中は初め山口姓であったとおもうが、何時からか不明だが、城^{じょう}の姓を用い、城舜海と称していた。尚中が佐倉の順天堂で大いに力働を發揮し、佐藤泰然の養子となる少し前までは城姓であったとおもう。そのころ彼の翻訳したものに後述のごとく城（鏐）舜海の署名がみられる。城という姓の由来が不明だが、父甫仙の旧姓北城の北を略したものかとおもう。後に佐藤尚中として日本じゆう^{まもる}に知られた高名の医者となるが、そのころ4男衛に城姓をとらせている。自分の若いときの姓を与えたのか、衛の生母は佐倉藩士の城氏の出という

説があり、その姓を名乗らせたのか、いずれとも決定できない。

潮来の北城家は順天堂と甚だ深いつながりをもっている。尚中の実父甫仙がその家の出であることは上述したが、尚中の妻サダ（慶応3年没）（衛らを生んだナホは後妻である）は北城東平の孫であり、尚中とはいとこの間柄であった。すなわち山口甫仙の実妹ヤスが麻生の高橋忠三郎に嫁して生んだ次女がサダである。そして長女、つまりサダの姉タミが常陸太田の高和清兵衛に嫁して高和東之助（後の順天堂第3代の主、佐藤進）を儲けたのだから、血統から云って北城家ほど順天堂と濃いつながりをもつ家系は他に探せないだろう。初代泰然と次の尚中との間は後者が夫婦とも他家からきたので、直接の血のつながりが無い。

泰然の血統はむしろ林家、三沢家、山村家、松本家、白戸家、山内家のほうに続いてゆく（藤のゆかり、明治34年と昭和8年）。

尚中の師匠……寺門静軒と安藤文沢

谷中の尚中之碑を續けて読んでみよう。「先生、諱は尚中、字は泰郷、舜海また笠翁と号す。本姓山口氏、父は甫僊と曰う。小見川侯の侍医たり、先生幼にして江戸に在り、老儒寺門子に従いて、ほぼ書史に渉る。去りて医を安藤文沢に学ぶ。隣坊に争闘して大傷する者あり、急ぎ文沢を召す。たまたま文沢家に在らず、先生縫女用いる所の鍼線を借り、往きて創口を縫合す。二十余刺、挙止自若、毫も難色なし。時に年甫めて十有六。文沢驚嘆して曰く、此れ国器なり。以て久しく我が門下に屈すべからずと。因りて佐藤泰然に就きて学ぶことを勧む。泰然は当世の良医、尤も外科に巧なりと。先生大いに喜びて贅を執り師事す。蘭書を講究し兼ねて手術を習う」

漢文学の大家が書いた文章で誇張した所もあるだろうとおもうが、尚中が少年のときから江戸に住み、まず寺門静軒（1796～1868）から漢文、儒学を受け、ついで医を安藤文沢（1807～72）に学んだことは確かであろう。何才のとき江戸にでたか不明だが、父山口甫仙が小見川藩主内田氏の侍

医だから、その勤めの関係であろうか。武鑑や江戸の切絵図でみると、小見川藩主内田氏の上屋敷は上麻布日ヶ窪にあったので、侍医の甫仙もそこに住んでいたかも知れない。

さて尚中が薬研堀の泰然の和田塾に入門したのが天保13年で16才のときといわれている。その前に尚中は安藤文沢の所にいて、更にその前に寺門静軒に師事したのだから、静軒に学んだのは天保10年前後と仮定しよう。そうすると尚中は数え年13才の少年で、静軒が44才くらいの壮年であった。碑文の「老儒寺門子に従い」は、今の感覚ではもっと年とった老儒者を想像する。

寺門静軒について近ごろ永井哲夫氏が詳しい伝記を出したので（昭和41年、理想社発行）、筆者には甚だありがたい。静軒の名は良、字は子温、通称弥五左衛門で、静軒は号である。寛政8年江戸の生れで、父は水戸藩士寺門弥八郎である。詳細は上記の単行本「寺門静軒」にゆずるが、偉い学者ながら極めて変った道を歩いた人である。尚中が就学したころは、すでに「江戸繁昌記」を出版して有名な人物になっていたとおもう。そのころの静軒の住いは浅草新堀端、西福寺権現堂の西というので、上麻布日ヶ窪の内田氏邸から今の小学校上級生だと歩いて通学するには遠すぎる距離である。

上記の永井氏の著書第78ページには尚中が静軒に学んだのは天保7年尚中11才のころから、静軒が筆禍に遇った天保13年までの数年がその時期であろうとある。筆者も賛成だが、上述のごとく天保10年前後が最もその可能性が大きいとみる。なお同書に「尚中は、明治初期の最も進歩的な医家であったが、芸能に理解も深く、落語家三遊亭円朝などを愛し、また自ら長唄を良くして『鄙の室』などの作がある。こうした洒脱な一面は幼時、漢学を授けられた師静軒の影響によるものであろうか」とある。面白い意見である。この一風変った儒学者を師として選んだのは尚中じしんなのか、父甫仙なのか、興味あることである。

同書の「寺門静軒年譜」では「江戸繁昌記・青楼之巻」の成立が天保12年の春で、その秋から天

保の改革がはじまり、内容があまりに享樂的な本を書いたということで、天保13年8月に静軒は「武家奉公御構」となり、江戸繁昌記は絶板となった。為永春水、柳亭種彦もこのとき罰せられた。

静軒は江戸に住むことを禁ぜられたのではないが、放浪の旅にでて関東の諸地、信州や越後などをめぐり歩いた。自らを「無用の人」と称していたという。安政5年(1858)の秋から約半年新潟に滞在し、このとき新潟繁昌記(正しい題は新潟富史という)を書き出版した。また武州の妻沼(いま埼玉県)の両宜塾で7年ほど教えた。そして慶応4年(1868)3月24日、いまの埼玉県大里村冑山で没した。享年73歳。同地の名家で彼と親交のあった根岸友山の弟三蔵(桂)に静軒の娘マチが嫁していたのである。彼の墓はその根岸家の墓地に建っている。

つぎに安藤文沢につき簡単に述べる。文沢は文化4年いまの埼玉県毛呂山町阿諏訪で生れた。西洋医術を修めて鳥羽藩主稲垣氏に仕え、江戸の四谷で業を開いていた。豪放な人で、社会主義的なところがあったという。後には種痘を熱心におこなったようである。尚中が文沢に就学した期間が明らかでないが、天保13年に文沢の薦めで尚中が和田塾に転じたという。そのとき文沢は36歳のはずである。

文沢の家の近くで喧嘩があり、大けがをした者があって、文沢がその治療に呼ばれたが相憎く留守で、代りに16歳の尚中が縫針と糸を借りてでか

け、20余針も刺して傷口を縫い合せて、しかも泰然自若、落ち着いていた。文沢はそれをみて大いに驚き、これは大人物であり、久しく自分の門下にとどむべきでない。外科に巧みな当世の良医佐藤泰然に師事するのがよいと尚中に勧めたという。この縫針の1件はどこまで正確か、かなり逸話的な所があるとおもうが、逸話の基となる何かの出来ごとが実際にあって、文沢が尚中の才能をみとめて、泰然の塾に入ることを勧めたのであろう。文沢の慧眼と己れを空しうする態度に感心する。そのおかげで佐藤尚中という天下の名医が生れることになった。

文沢は明治維新のさい五稜郭で官軍に抗して獄中にあった荒井郁之助、大鳥圭介たちに物を差入れたりして、よく世話をしたといわれる。文沢の子、安藤太郎も榎本武揚の部下として官軍と戦ったのである。太郎は後に明治政府の外交官となって活躍し、また妻文子とともに禁酒運動の先頭に立った。

文沢の墓はいま杉並区永福町の理性寺にある。将棋の駒のような形をしたりっぱな墓石で「配若海氏」といっしょに葬られている。文沢は文化4年5月5日の生れ、明治5年6月29日歿と刻まれている。享年66歳。

尚中が若いとき教えをうけた寺門静軒も、安藤文沢も当時としてはわりあい自由思想家であり、反骨精神の持ち主であつたらしいことが面白いとおもう。